

# 1 令和5年度 全学FD活動概要

## 1-1 本学 FD 活動の概要

本学では平成 20 年度、「金沢大学 FD 委員会規程」（後掲：4 資料編）に基づき、教育企画会議に全学の FD 委員会を設置した。

**FD**（ファカルティ・ディベロップメント）とは、

授業の内容・方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究、研修等の自発的取り組みをいう。（金沢大学における FD 活動指針第 2）

FD 委員会は、平成 20 年度に「金沢大学における FD 活動指針」（後掲：4 資料編）をまとめた。同指針は FD 活動が継続的かつ実質的に改善するために、FD 活動をいわゆる PDCA サイクルの中に位置づけている（図 1）。その一環として FD 委員会は各部局等が毎年度作成する報告書に基づき、当該年度の全学における FD 活動に関する報告書（「年度報告書」）を作成することとした。この規定に基づいて作成したものが本報告書である。

本報告書では、各部局等が令和 5 年度の活動に対して行った自己評価のみならず、令和 6 年度における改善に向けての取り組み予定についてもまとめている。これらの点について他部局等の状況を相互に確認し、FD 活動を相互に促進しあうことで、本学全体の FD 活動が継続的かつ実質的に改善することが期待できる。

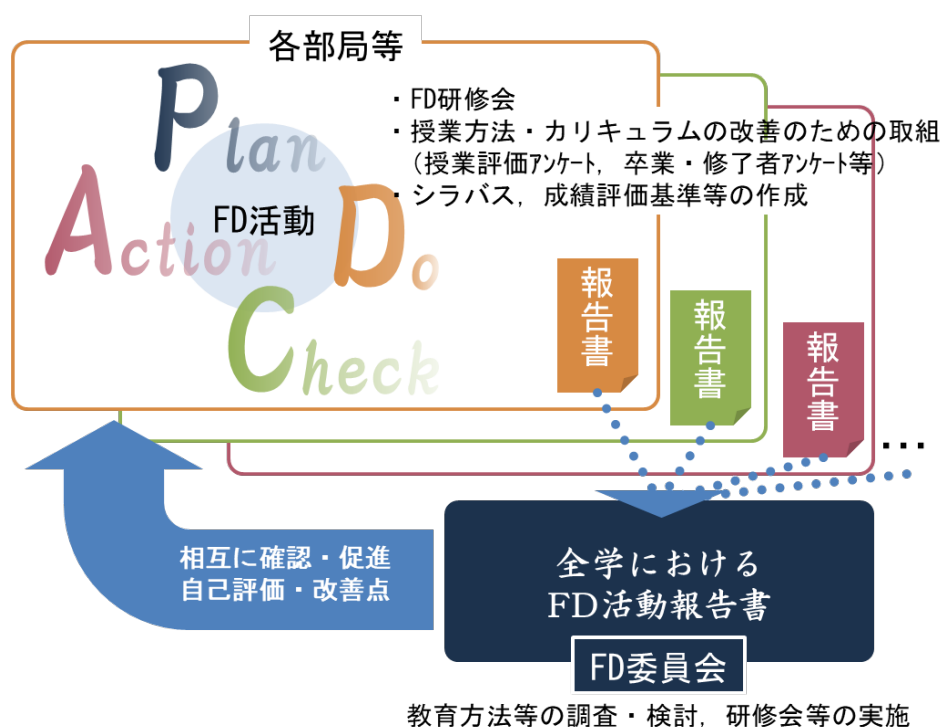


図 1 金沢大学における FD 活動

なお、同指針の特徴の1つとして、授業の内容や方法の改善に関することにとどまらず、学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等、学生支援に関する活動をもFD活動の中を含めている点が挙げられる。この点に関連して、本学では教育企画会議学生生活委員会を中心に「学生支援・学修支援」に資する目的で『教職員必携 学生サポートガイドブック』を毎年度、見直しを行い、アカンサスポータルに掲載するとともに、関係教職員にエッセンシャル版パンフレットを配布している（図2）。その内容は学生相談、留学生支援、キャリア支援、障がい学生支援等、多岐にわたっており、教職員は本冊子を有効に活用することにより、学生が抱えた問題を早期に解決し、すべての学生が「充実した学生生活」が送れるように、学生支援に努めている。

また、教員のFD活動支援や学生支援の分野で、職員の果たすべき役割はより一層大きくなりつつある。こうした現状に鑑み、職員のSD（スタッフ・ディベロップメント）及びBSD（バックアップ・スタッフ・ディベロップメント）活動についての指針を盛り込んでいることも同指針の特徴の1つである。

ところで、同指針では、教学マネジメントセンターがFD及びBSD活動に対して必要な支援を行うことを定めている（「金沢大学におけるFD活動指針」第8）。教学マネジメントセンターが令和5年度に行ったFD・BSD活動及び他部局等のFD・BSD活動に対して行った支援の内容については「1-5 教学マネジメントセンターの活動」において述べる。

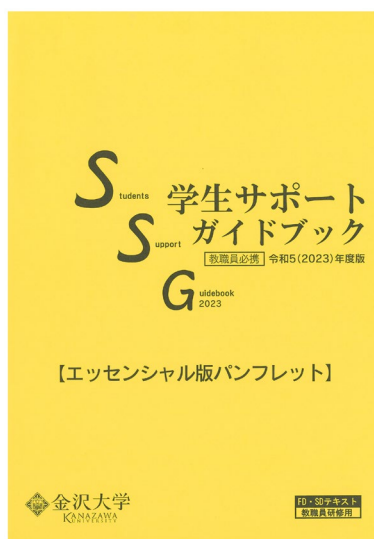


図2 教職員必携 学生サポートガイドブック

### 1-2 各部署等からの回答をもとにした点検

本学は、学則第3条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価（以下「自己点検評価」という。）並びに授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行う」と定めている。また、「金沢大学におけるFD活動指針」（以下、FD活動指針）においては、研修及び研究につけ加えて、「改善に向けての取組みを、計画・実践・評価・改善のサイクルの中に位置づけ、より組織的かつ継続的に行うことにより、実質的な改善へと繋げて」いくとしている。この指針を受けて、全学および各部署は、これら学則、「FD活動指針」等に基づきFD活動を推進している。

計画・実践・評価・改善のサイクルとは、学類、専攻ごとに、①学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、卒業・修了時における到達目標を明確にする、②ディプロマ・ポリシーに沿ってカリキュラムを体系化し、各授業科目の役割をマップ及びツリーという形で可視化する、③各授業科目のカリキュラム上の位置付け、教育内容・方法・到達基準をシラバスで学生に伝達する、④授業科目および教育プログラムの達成状況を、成績分布・授業評価アンケート・学修ポートフォリオ・卒業・修了者アンケートで確認する、⑤それらの分析結果に基づいて、各授業科目の教育内容・方法の改善、教育プログラムの改善を行い、部局におけるカリキュラム（マップ及びツリー）を再検証するというものである。

令和5年度は、FD活動報告書の効率かつ効果的な構成の観点から、各部署への照会事項を厳選することとした。併せて、各部署等のFD活動の掲載について、照会事項単位での掲載を改め、各部署単位での「FD活動計画」➡「諸活動チェック」➡「自己評価」という改善向上サイクルを重視する観点から部局単位での掲載とした。

各部署のFD活動を事実に基づき確認するため、「令和4年度FD活動報告書」に記載した当該年度の自己評価・総評及び令和5年度に向けた改善計画に沿いながら、「照会事項1 シラバス改善のための取組みの実施状況」、「照会事項2 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況」、「照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況」、「照会事項4 FD研修会の実施状況(本学主催)」、「照会事項5 令和5年度FD活動の自己点検及び総評」の5項目について照会した。以下に、それらについての回答を点検した結果について述べる。なお、項目によって回答母数が異なる場合もある。

### 照会事項1 シラバス改善のための取組みの実施状況

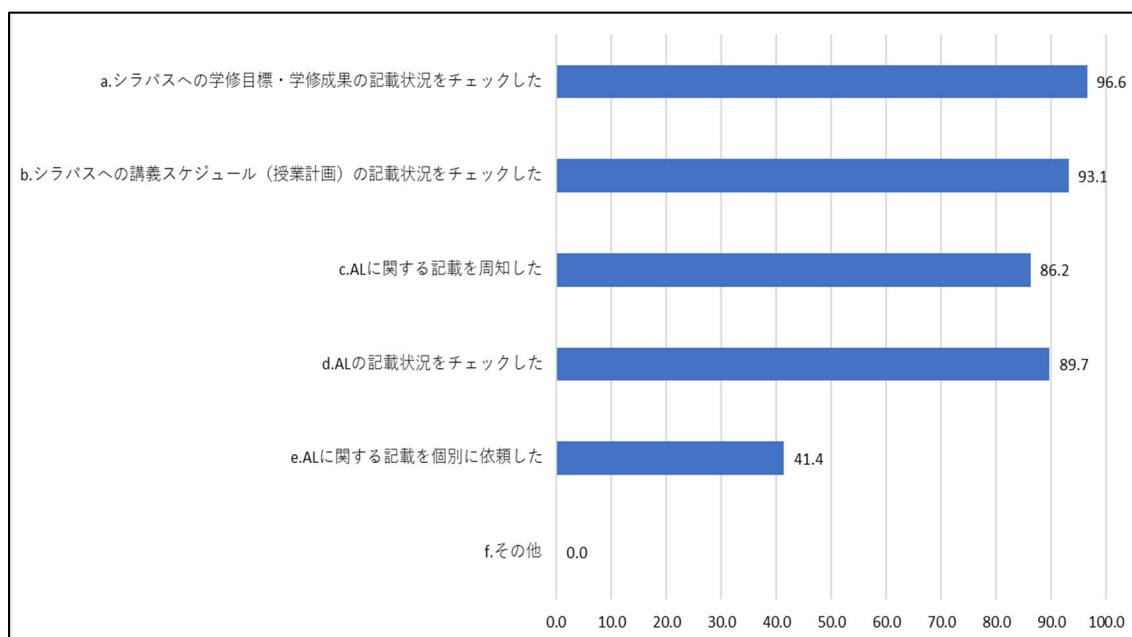
【検証事項1】令和5年度の実施状況

#### 1) シラバスの点検①（教学マネジメント関連）

シラバスの点検については、大きく教学マネジメント関連とSGU関連の2つに分けた設問を設定した。教学マネジメント関連としては、「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」、「AL（アクティブ・ラーニング）に関する記載を周知した」、「ALの記載状況をチェックした」、「ALに関する記載を個別に依頼した」、「その他」のチェック欄を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表1-2-1のとおりであるが、シラバス作成における基本項目である「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」については、前年度より改善が見られるが、法学類がチェックしていない。また、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」については、前年度同様に、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科がチェックしていない。シラバスのチェック体制は改善されつつあるが、引き続き、改善に努める必要がある。

図表1-2-1 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）



#### 2) シラバスの点検②（SGU関連）

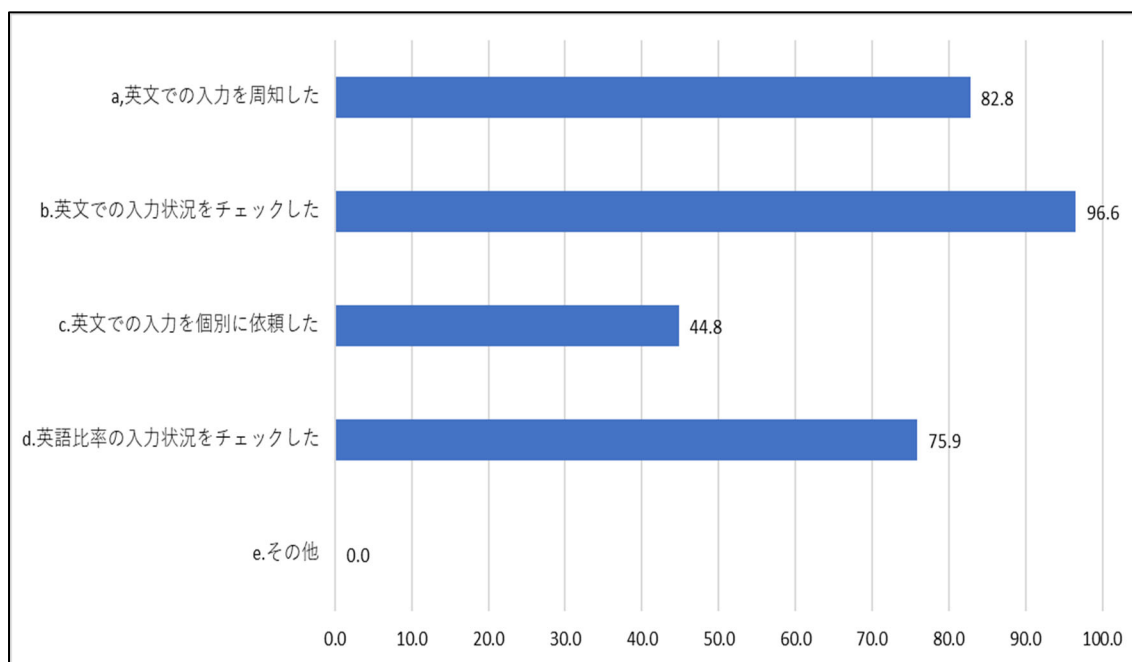
次に、SGU関連で求められている授業英語化に関する設問として、「英文での入力を周知した」、「英文での入力状況をチェックした」、「英文での入力を個別に依頼した」、「英語化率の入力状況をチェックした」、「その他」についてのチェック欄および具体的内容について回答する形としている。

各項目のチェック率は図表1-2-2のとおりであるが、「英文での入力を周知した」につい

## 1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

ではフロンティア工学類・フロンティア工学専攻，地球社会基盤学類・地球社会基盤学専攻，国際基幹教育院外国語教育部門，医薬保健学総合研究科，先進予防医学研究科，「英文での入力状況をチェックした」については法学類がチェックしておらず，引き続き，改善に努める必要がある。

図表 1-2-2 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）



通常のシラバス点検および授業英語化シラバス点検については，毎年度の定期的な作業として定着する傾向にあるが，各種ヒアリング調査等を通して明らかとなる実態は，入力されているかどうかのチェックに留まっていて，シラバスの記載内容に踏み込んだチェックについては，依然として改善の余地が感じられる。また，多くの学類でシラバス点検について，学類会議，教務・学生委員会などを中心に組織的に確認している一方で，個人レベルでの点検実施や，誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことは今後の課題であると考えられる。

**照会事項2 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況**

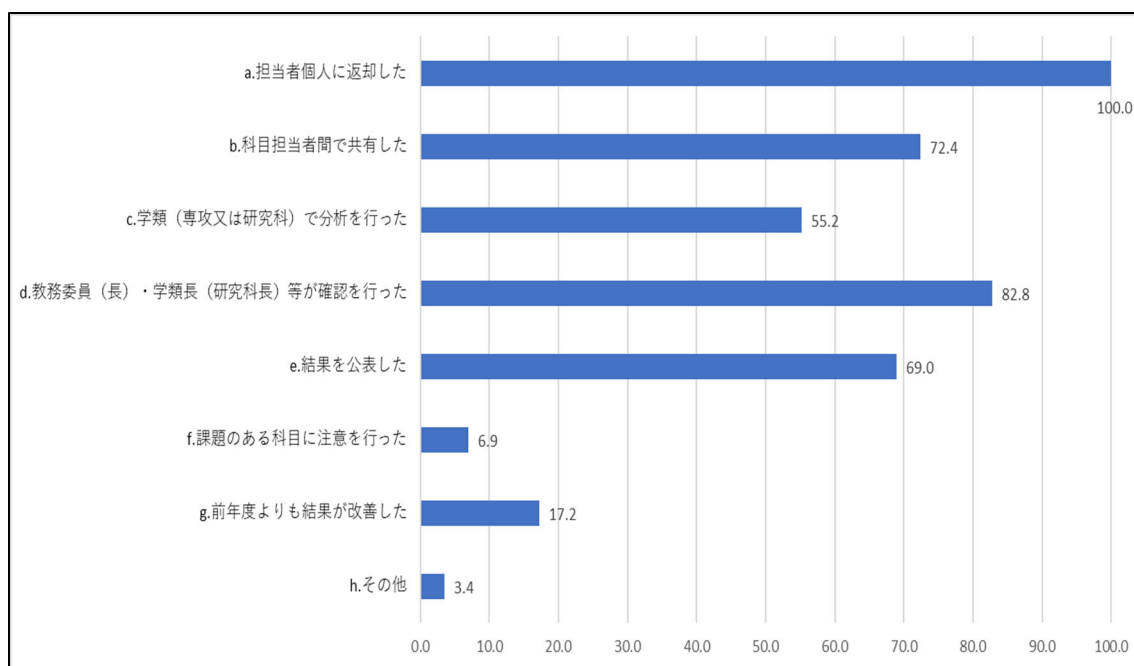
【検証事項1】授業評価アンケート及び卒業・修了者に対するアンケートの結果を、授業方法・カリキュラムの改善のために、どのように活用したか。

1) 授業評価アンケート

授業評価アンケートの結果をどのように授業改善に活用したかでは、「担当者個人に返却した」、「科目担当者間で共有した」、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「結果を公表した」、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-3 のとおりであるが、「担当者個人に返却した」が 100% となっているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」にチェックが入っている。今後、さらに、授業評価アンケート結果の利活用を促していく必要がある。

図表 1-2-3 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）



「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「結果を公表した」で半数前後、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」においては、少数の教育担当部局でしか実施されておらず、さらなる改善を行う必要がある。

2) 卒業・修了者に対するアンケート

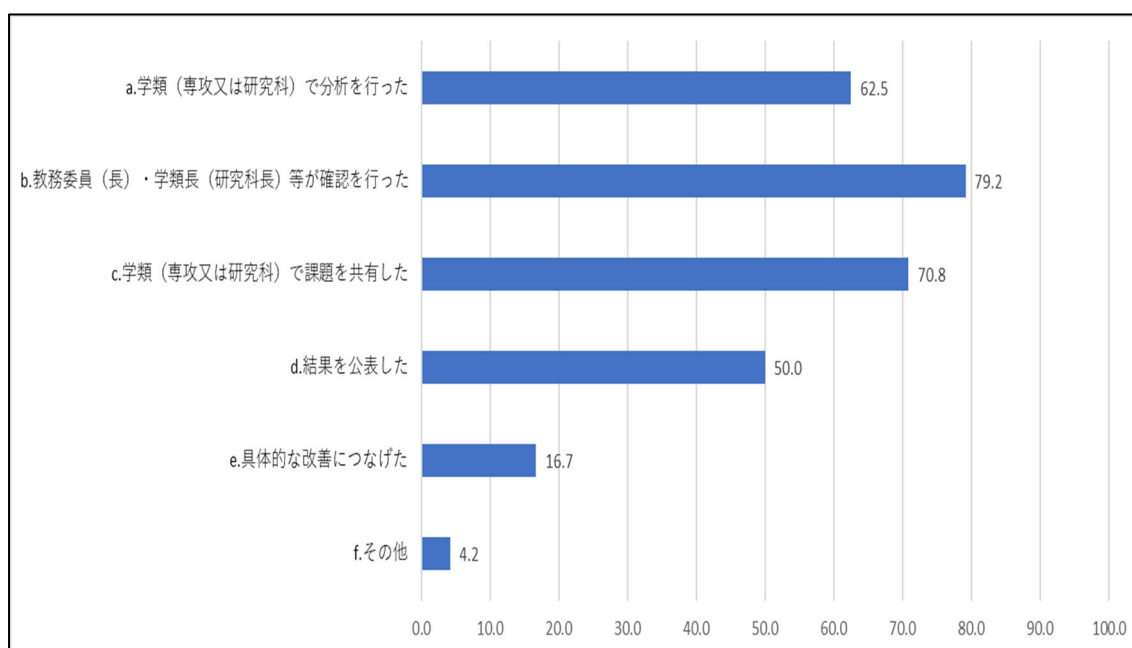
卒業・修了者に対するアンケートに関しては、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、

## 1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」、「結果を公表した」、「具体的な改善につなげた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-4 のとおりであるが、人文学類、法学類、教職実践研究科ですべての項目にチェックが入っているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」にチェックが入っている。全般的に、前年度と比較して、卒業・修了者アンケート結果の利活用が促進されている。

図表 1-2-4 各項目のチェック率（回答母数：24、単位：％）



卒業・修了者に対するアンケート結果の確認、共有は一定程度行われているが、具体的な分析や改善につなげることについて課題を残している。

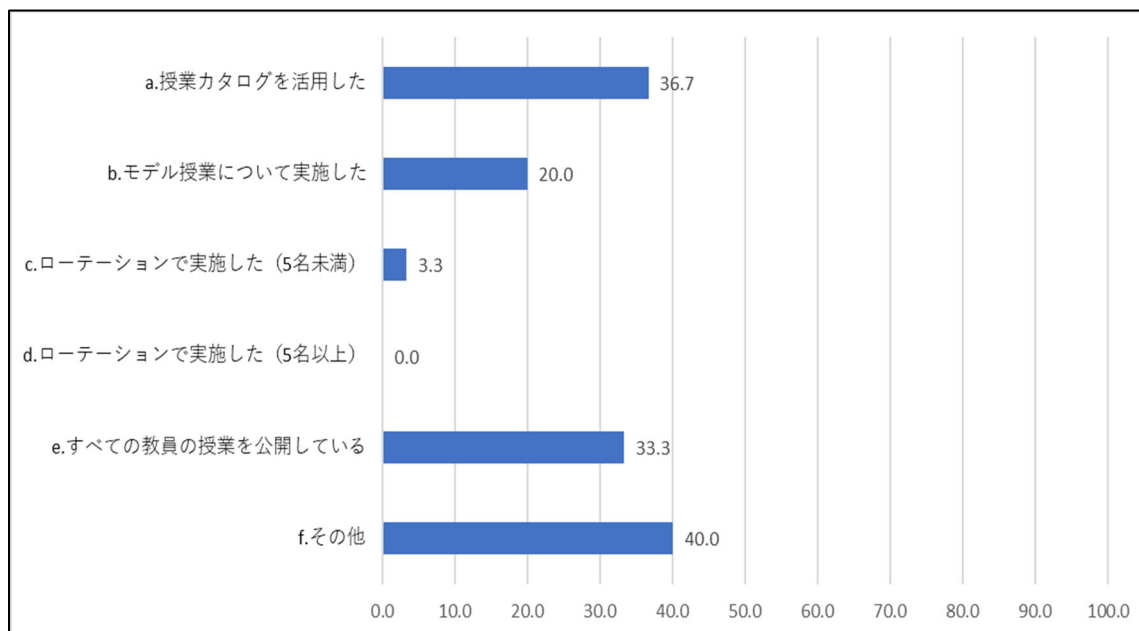
### 【検証事項2】教員相互の授業参観（遠隔授業の参観を含む）

遠隔授業の参観を含む教員相互の授業参観に関しては、「授業カタログを活用した」、「モデル授業について実施した」、「ローテーションで実施した（5名未満）」、「ローテーションで実施した（5名以上）」、「すべての教員の授業を公開している」、「その他」について回答を求めた。

「授業カタログを活用した」「モデル授業について実施した」「すべての教員の授業を公開している」について、一定程度の取組が見られるが、授業参観という形態でのFDには改善が必要である。一方で、ほかの設問への回答とは大きく異なり、4割の教育担当部局が「その他」にチェックをつけ、各部局特有の工夫を施した多様な取組についての回答がなされている。



図表 1-2-5 各項目のチェック率（回答母数：30，単位：％）



### 照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況

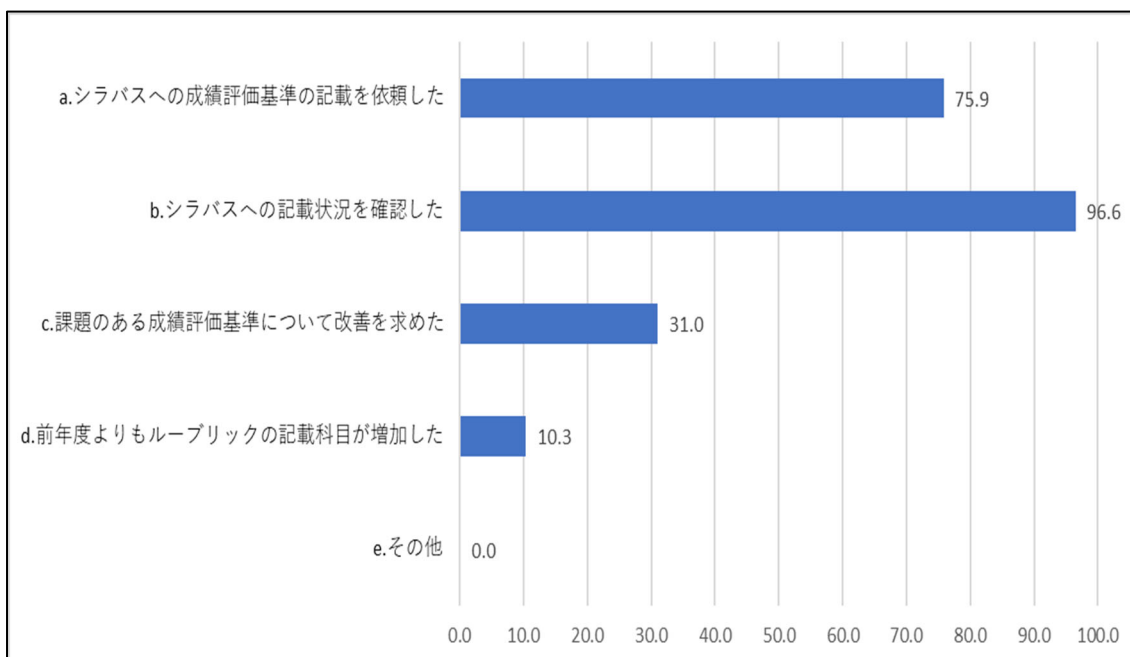
#### 【検証事項1】令和5年度の実施状況

##### 1) 成績評価基準等の作成・検証

成績評価基準等の作成・検証では、「シラバスへの成績評価基準の記載を依頼した」、「シラバスへの記載状況を確認した」、「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもループリックの記載科目が増加した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-6 のとおりであるが、人文学類、薬学類・創薬科学専攻・薬学専攻では、全ての項目にチェックがつけられており、成績評価基準に対する積極的な取り組みがうかがえる。前年度と比較して、「シラバスへの記載状況を確認した」について、大幅な改善が見られた。

図表 1-2-6 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）



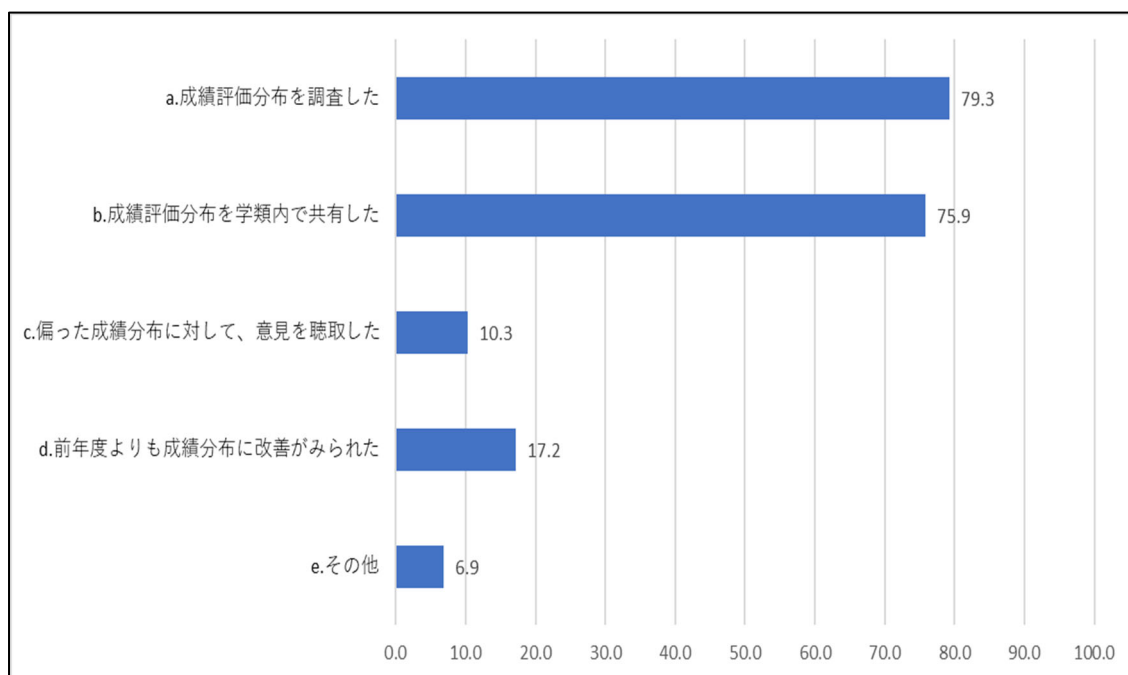
「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもルーブリックの記載科目が増加した」の数値が低い。ルーブリックについては科目特性の問題、既に多くの科目で記載されている可能性があるためある程度は仕方ないといえるが、課題のある成績評価基準については恒常的なシラバス点検体制の中で可及的速やかに改善されることが望ましく、FDとして課題である。

## 2) 成績評価方法の検証

成績評価方法の検証に関しては、「成績評価分布を調査した」、「成績評価分布を学類内で共有した」、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-7 のとおりであるが、生命理工学類・生命理工学専攻、法学研究科（修士課程・専門職学位課程）では、全ての項目にチェックが入っており、成績分布への関心が高いことがうかがえる。一方、1つしかチェックのない教育担当部局も少数ではあるが存在していることは課題である。成績をつけるのは教員の専権事項ではあるが、あまりに偏りのある成績分布は好ましくないという成績分布に関する認識共有を進める必要性が認められる。

図表 1-2-7 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）



「成績評価分布を調査した」「成績評価分布を学類内で共有した」が高い数値を示しており情報共有は浸透していることがわかる。しかし、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」は1割程度、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」は2割満たない程度と低い数値となっており、成績分布に関する組織的関与に課題を残している。「その他」では、回答選択肢とは異なるが成績分布への異なるアプローチの工夫が行われていると思われる。

#### 照会事項4 FD研修会の実施状況（本学主催）

融合学域、医学類をはじめとして、部局独自のFD研修会について、近年、充実が見られる。この傾向は、分野ごとにおける教育・学生支援に関する新たなテーマや課題が多いことを表していると言えよう。組織改組やカリキュラム改善等を行った部局においては、直面する新しい課題について、FD研修会のテーマに掲げられている。対面及びオンラインを含めた教授法、学修支援ツールの使い方、研究指導、学生のこころのケア、留学生対応など、幅広いテーマが話題となっている。これらの部局主催FD研修会の中には、教育、研究に関して共有可能なテーマのFD研修会については全学に公開・広報されることが望まれることから、教学マネジメントセンターにおいて共催支援、学内広報支援を行うケースが徐々に増えてきている。

#### 今後の課題

今回、教学マネジメントの観点から、シラバスにおける学修目標・学修成果の記載状況、講義スケジュール（授業計画）の記載状況を新たに点検することにしたこと、さらには、卒

## 1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

---

業・修了者アンケート結果等を活用しながら、授業改善だけではなく、学位プログラムレベルのカリキュラム改善に着目するようにしたことから、照会事項の改善充実を図った。それらを踏まえて、照会事項1~5の回答を総括し課題について指摘したい。

シラバス改善のための取組みの実施状況に関して、学修目標・学修成果、講義スケジュール、AL 関連の記載および英文での入力状況については大半の教育担当部局で確認が行われていた。一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことなど、シラバスの組織的・恒常的な点検体制が構築されていない教育担当部局があることも判明しており、今後の課題であると考えている。

次に、授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況では、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果を積極的に活用している教育担当部局があることが明らかになったが、授業評価アンケート結果で課題のある科目への対応が十分行われていないこと、および、それに関連するが、前年度よりも結果が改善しているケースが少ないこと、卒業・修了者アンケート結果の分析、それを反映した改善活動が不十分であること、授業参観が不活発であること、課題のある成績基準改善が十分進んでいないこと、偏った成績分布への対応が不十分であること、など、今後の課題も見えてきた。

教員相互の授業参観については、Web上で確認できる授業カタログの活用は一定程度進んでいることが確認できたが、具体的な授業参観についてはまだまだ低調であることも判明した。ただし、授業参観以外の多様な形態での教員間での情報共有、情報公開は実施されていることが「その他」への回答から見て取れるため、今後の改善充実に活かしていきたい。

成績評価基準等の作成・検証状況に関しては、成績評価分布の部局内での共有は進んでいるが、偏った成績分布への対応が不十分な点が明らかになっている。このことは、成績評価に関する組織的な関与について、更なる改善充実を進める必要がある。

学修目標・学修成果を明確にしたシラバス作成、それに基づく授業実施および成績評価、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果による改善がよりよい授業を作る上でのPDCAサイクルであり、今後の改善が一層必要であることが、今回の照会事項への回答から明らかになった。


令和5年度において、「金沢大学における教育の内部質保証に関する指針」（後掲：4 資料編）が策定され、各部局からのFD活動報告は学位プログラムレベルや授業科目レベルのモニタリング機能として重要な位置付けとなっている。3つのポリシーを念頭においてカリキュラム改善、授業改善が一層進むよう、当該年度の自己評価及び総評、さらには、翌年度に向けた改善計画を通して、学生のためにより良い教育を提供できるように努めていく必要がある。毎年のように新たな課題が出てくるが、教育担当部局として学修者重視の姿勢の下、教員間での認識を共有し、課題、解決方法を組織として検討するという体制を構築・維持していくことが、自己評価4（大いに評価出来る）につながると考えられる。

### 1-3 FD委員会の活動

令和5年度における活動		
令和5年4月4日	(火)	令和5年度第1回全学FD研修会「新任教員説明会<教育・学生編>」開催
令和5年7月4日	(火)	第1回FD委員会開催
令和5年7月27日	(木)	第2回FD委員会開催（書面附議）
令和5年8月8日	(火)	第2回全学FD研修会「分野を超えた専門知の組み合わせとは ～Society 5.0における人材育成の姿～」開催
令和5年9月27日	(水)	第3回全学FD研修会「KU-DP アドバイザリーボード「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」」開催
令和5年10月27日	(金)	第4回全学FD研修会「FD活動報告書成果発表会」一学類等における組織的FDの取組事例－開催
令和5年11月28日	(火)	「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」共通テーマ4 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」開催 (金沢大学、東京都市大学、麻布大学、早稲田大学主催)
令和5年12月27日	(水)	第3回FD委員会開催
令和6年1月23日	(火)	「なぜ今、人文社会系大学院の改革・拡充なのか？」開催（人間社会研究域主催）
令和6年2月22日	(木)	第4回FD委員会開催（書面附議）
令和6年2月27日	(火)	令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信シンポジウム「STEAM教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」開催 (「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画)
令和6年3月13日	(水)	未来創成教育環シンポジウム「教育現場のAI使用」開催（未来創成教育環主催）

- 各委員会の協議・報告事項及び議事要旨については下記にて公開している。  
「アカンサスポータル」→「業務」→「業務マニュアル等リンク集」→「会議」→「学内会議の議事要旨等」  
<https://manual.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.php/gakunaikaigi/>（学内限定）
- 各研修会（共催企画は除く。）の動画又は資料については本学ポータルサイト（アカンサスポータル）にて公開しているので、教職員は随時閲覧可能である。

● 【研修会】

令和5年度第1回全学FD研修会 「新任教員説明会<教育・学生編>」	
主催	教育企画会議専門委員会 FD委員会及び教学マネジメントセンター
日時	令和5年4月4日(火) 10時00分～11時55分
会場	総合教育講義棟2階 A1 講義室
対象	前年度研修会(令和4年4月4日開催)以降に本学に採用された教員を主とし、関心のある教員や学務系職員の参加も可能
参加者	88名
概要	<p>新任の教員を主な対象とする全学の研修会は、平成20年度から毎年度開催している。従来は、「教養教育担当に関する初任者研修」(共通教育機構が実施、平成16～18年度)、「新任教員等研修会(兼共通教育担当に関する研修会(初任者対象))」(教育担当理事と共通教育機構長の連名で実施、平成19年度)として開催されてきた。</p> <p>本学における授業支援体制と学生支援の取組を把握することで、教育体制全般に対する理解を深めることを目的とする。</p>
プログラム	<p>(1) アカサポータル及び教務システムの活用 (森 祥寛 学術メディア創成センター 助教)</p> <p>(2) 学生指導と支援(片岡 邦重 学長補佐(教育改革・学修支援担当))</p> <p>(3) 学生の心のケア及び学生相談(足立 由美 保健管理センター 教授)</p> <p>(4) FD及びシラバス (林 透 教学マネジメントセンター 教授)</p>
	
アンケート結果抜粋	<p>・学生指導・授業に関してだが、着任後すぐに授業を持たない教員にとっては、おそらく実際に指導・授業を行うタイミングには忘れてしまい、もう一度資料をみる必要が出てくるなど手間が生じる。例えば、大学で初めて講義を持つタイミングで、時期初めに教員が参加することを要請するなど、柔軟に対応してはどうか。</p>

第2回全学FD研修会 「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society5.0における人材育成の姿～」(「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画)	
主催	「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会
共催	教育企画会議専門委員会 FD委員会、教務委員会
日時	令和5年8月8日(火) 14時00分～16時00分
会場	Zoomによるオンライン開催
参加者	118名(他大学の参加者を含む)
概要	「分野を超えた専門知の組み合わせ」をテーマに、基調講演や事例紹介を通して参加者とともに考える機会となった。
プログラム	<p>・基調講演「分野を超えた専門知の組み合わせとは？」 (講師：深堀 聡子 九州大学 未来人材育成機構 教授)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例紹介 「融合学域における文理融合教育が目指すもの」 (中山 晶一郎 金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授) 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) を通した人材育成」 (山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教) (高木 亮太 TSK 株式会社 代表取締役社長)</li> <li>意見交換・クロージング</li> </ul>
アンケート 結果 抜 粹	・2時間という短い時間でしたが、コンパクトで中味の濃い FD 研修会であった。

### 第 3 回全学 FD 研修会 「KU-DP アドバイザリーボード「実践インターンシップを通した学びの成果発表と意見交換」

主 催	「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会
共 催	金沢大学キャリア支援室, 教育企画会議専門委員会 FD 委員会, 教務委員会
日 時	令和 5 年 9 月 27 日 (水) 14 時 00 分~16 時 00 分
会 場	総合教育講義棟 2 階 A1 講義室への出席または Zoom によるオンライン参加
参 加 者	62 名
概 要	全学域学生対象に創設した「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」では、協働実践科目 (300 番台) として「実践インターンシップ」を令和 4 年度より開講している。今年度 Q2 期に開講した「実践インターンシップ」の 3 つのプロジェクトについて、受講生 18 名による合同成果発表会を新たに企画し、受入先の企業や地域コミュニティはもとより、学内外の学生・教職員に広く公開し開催した。
プログラム	(1) アドバイザリーボードメンバーによる講演 「学生を変える産学協働・地域協働による学び」 (鹿島 我 京都光華女子大学短期大学部 ライフデザイン学科 教授) (2) 実践インターンシップ成果発表及び質疑応答 (3) 全体による意見交換 (アドバイザリーボード)



アンケート 結果 抜 粹	<ul style="list-style-type: none"> <li>「企業で働く社員紹介ムービーの制作」をはじめ、学生との協働活動を希望される企業の方も多いと思います。winwin な関係となりますよう、応援しています。</li> <li>企業側として、どのようなテーマを出すのが生徒さんたちにとって学びになるのかがわかり、とても有意義な発表会でした。</li> </ul>
-----------------	--

第4回全学FD研修会 「FD活動報告書成果発表会」ー学類等における組織的FDの取組事例ー	
主催	教育企画会議専門委員会FD委員会, 教学マネジメントセンター
日時	令和5年10月27日(金) 13時30分~15時30分
会場	Zoomによるオンライン開催
参加者	51名
概要	金沢大学では、毎年度部局ごとの組織的なファカルティ・ディベロップメント(FD)活動について「金沢大学FD活動報告書」としてまとめ、公開することで活動の共有と振り返りを図っている。令和4年度FD活動報告書においては、学問分野の特性に応じた活発な取組みを紹介しており、部局を越えて参考になる事例が多い。今回は、人文学類、国際学類、地域社会基盤学類、保健学類及び国際基幹教育院におけるFD活動を全学的に共有した。
	
プログラム	「FD活動報告書成果発表会」ー学類等における組織的FDの取組事例ー (ファシリテーター: 林 透 教学マネジメントセンター 副センター長)
アンケート結果抜粋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体討論でもあったように、FD研修会の他学類への開放やオンデマンド配信の取り組みを進め、教員の研修活動に役立ててほしい。</li> <li>・地球社会基盤学類での活動報告に驚きました。優秀教員を選出しているのですね。</li> </ul>

「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」共通テーマ4 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」	
主催	金沢大学, 東京都市大学, 麻布大学, 早稲田大学
日時	令和5年11月28日(火) 13時30分~17時00分
会場	早稲田大学早稲田キャンパス国際会議場への出席またはZoomによるオンライン参加
参加者	166名
概要	DPでは、令和4年度から、当該メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲを横断した共通テーマを4つ設定し、採択校9大学が各メニューを越えて相互連携することにより、汎用性ある効果を蓄積・発信することを目指している。このうち、共通テーマ4「多様な学びの成果の測定及び社会通用性のあり方を情報交換・検討」をテーマに開催された。
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基調講演①「九州大学共創学部における学生の学びと進路状況」 (鏑木 政彦 九州大学 副学長・共創学部長)</li> <li>・基調講演②「文理融合系学部の現状と課題」 (村山 和生 株式会社ベネッセ i-キャリア まなぶとはたらくをつなぐ 研究所 主席研究員)</li> </ul>



- ・採択校からの成果報告  
 (林 透 金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長 教授)  
 (杉浦 正吾 東京都市大学 教育開発機構 特任教授)  
 (菊水 健史 麻生大学 大学教育推進機構 教学 IR センター長 教授)  
 (山田 寛邦 早稲田大学 大学総合研究センター 次席研究員)
- ・パネルディスカッション「文理横断・文理融合教育を通じた学生の成長」  
 (ファシリテーター：山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教)



アンケート結果抜粋

・後半の各校の可視化の取り組み、学生さんの姿は非常に有意義だった。こちらに特化したセミナーを期待したい。テーマ・ 이슈に特化した教育と、文理横断・融合の教育は近接しているものの異なるもの。また、インターディシプリンであること（経済と文学といった組み合わせを含む）と、それが文理にまたがること、それぞれどのような成果が期待できるのか興味が惹かれる。

### 「なぜ今、人文社会系大学院の改革・拡充なのか？」

主催	金沢大学人間社会研究域
共催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会
日時	令和6年1月23日(火) 15時00分～16時30分
会場	人間社会第1講義棟102講義室
参加者	51名
概要	現在、文系の大学院の改革と拡充が大学教育における課題になっている。しかしながら疑問が湧き起こる。文系の大学院を拡充しても、社会は大学院で身につける能力を必要としているのか。大学院学生はどのようなキャリアパスを描けばいいのか。長くなった学生生活にかかる費用と労力は報われるのか。ひょっとするとこの状況は1990年代の大学院設置ラッシュの繰り返しではないのか。そもそも文部科学省の展望はいかなるものか、など。ならば直接、文部科学省の担当官に質問をしてみよう、というのが今回の企画である。理工転換や、中央教育審議会の大学院教育報告とりまとめの主担当をされていた池田宗太郎氏を講師に迎え、国の方向性、これからの社会における大学院の位置づけなどを伺った。
プログラム	「なぜ今、人文社会系大学院の改革・拡充なのか？」 (池田 宗太郎 文部科学省 研究開発局宇宙開発利用課 課長補佐 ((前) 高等教育局高等教育政策室大学院 係長))



<p>令和 5 年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム「STEAM 教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」(「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画)</p>	
主 催	金沢大学 (幹事校)・新潟大学・信州大学・大正大学・東京都市大学・麻布大学・千葉大学・早稲田大学・名古屋商科大学
日 時	令和 6 年 2 月 27 日 (火) 13 時 00 分～16 時 40 分
会 場	ナノ生命科学研究所棟 4 階 メインカンファレンスルーム (角間キャンパス南地区) への出席または Zoom によるオンライン参加
参 加 者	145 名
概 要	<p>文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」では、これまでの教育や学修の枠組みにとらわれることなく、STEAM 教育などを通して新たな価値を創造し、実践できる人材の育成を目指している。新しい時代の人材育成には、学校教育や社会との接続によるエコシステムの構築が大きな礎となる。本シンポジウムは、大学・高校・企業の視点を交えながら、DP 事業による取組の意義や持続性について考える機会となった。</p>
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基調講演①「今なぜ、異分野融合・協働が必要なのか、そして、その価値とは？」 (岡部 徹 東京大学生産技術研究所 所長, 一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム (PLIJ) 理事)</li> <li>・基調講演②「学域学類制の歩み 15 年の軌跡」 (森本 章治 金沢大学理事 (教育・高大院接続・大学院改革・情報担当) / 副学長)</li> <li>・採択校からの成果報告 (福島 治 新潟大学 教育基盤機構副機構長・副学長, 教学マネジメント部門長) (上畠 洋佑 新潟大学 教育基盤機構 准教授) (坂本 泰宏 信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所 特任准教授) (前田 長子 大正大学 教学マネジメント推進機構 学修支援センター教授) (縣 拓充 千葉大学大学院 国際学術研究院 特任講師) (小野 裕二 名古屋商科大学 商学部 学部長)</li> <li>・パネルディスカッション (ファシリテーター: 山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教)</li> </ul>



アンケート結果 抜粋 ・今回は大学起点での DP 事業の成果が何え、有意義でした。とは言え、探究活動や STEAM 教育のもっと実のあるものとしていくには、初等教育、大学、社会とバラバラな施策を展開するだけではなく、連携した施策が重要だと思いました。

### 未来創成教育環シンポジウム「教育現場の AI 使用」

主催 未来創成教育環 基幹教育イニシアティブ部門 学術リテラシー企画部

日時 令和 6 年 3 月 13 日 (水) 15 時 00 分～17 時 00 分

会場 総合教育講義棟 A1 講義室への出席または Zoom によるオンライン参加

参加者 118 名

概要 昨今の生成 AI や機械翻訳の普及は、世界の教育現場に大きな影響を及ぼしており、教育のしかたや評価方法に大きな変化をおこしつつある。これまで金沢大学や北陸地区で AI と研究、AI とデジタル人材育成などに関するシンポジウムは、いくつかあったが、一般の学生や教員が授業内外で AI をどのように利用し、それが教育にどのような意義や影響をもたらすのか、ということに関するシンポジウムは、まだ開催されていない。そこで、未来創成教育環は標記シンポジウムの開催を計画した。

プログラム

- ・ 基調講演「生成 AI・機械翻訳で大学教育はどう変わるか——学術リテラシーの視点から——」  
(トム・ガリー 東京大学 名誉教授・グローバル教育センター 特任教授)
- ・ 事例紹介：データサイエンス教育  
(中澤 嵩 学術メディア創成センター 准教授)
- ・ 事例紹介：医療教育  
(野村 章洋 融合学域 准教授)
- ・ 事例紹介：学生の AI 使用  
(八柳 祐一 国際基幹教育院 教授)
- ・ ディスカッション



## 1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

令和5年度における全学及び各部局等のFD活動は種々実施され、全学のFD研修会（前掲：1-3）及び各部局等のFD研修会（後掲：2 各部局等のFD活動）も多数実施された。

その中で、特色あるFD活動を各々1つピックアップし、紹介する。

### 【学域等及び研究科単位】

学域(人間社会学域, 理工学域, 医薬保健学域), 研究科(人間社会環境研究科, 自然科学研究科, 医薬保健学総合研究科), 国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動は次のとおり。

部局名	FD活動
人間社会学域	<p>令和5年度は人間社会学域として3回のFD研修会を実施した。</p> <p>第1回目は, 令和5年6月15日に昼休み時間を利用したランチオンセミナーとして「人と自然の共生－恵みと災いの両面から－」と題し, 地域創造学類青木賢人准教授によるオンライン研修会を実施した(出席者数: 教員18名, 事務職員1名)。</p> <p>第2回目は, 令和5年9月28日に昨年度実施したCOIL型教育の研修に引き続き, 「COIL型教育を推進するために」と題して, 信州大学・仙石祐講師, 蒙埴准教授, 金沢大学・渡辺敦子准教授を講師に迎え, COIL型教育の事例紹介を通して具体的な進め方や問題点についての研修会を対面で実施した(出席者数: 教員17名, 事務職員1名)。</p> <p>第3回目は, 令和5年10月27日に「ハラスメントのない大学を目指して」と題し, 事前に本学総合相談室による人間社会学域の学生・教職員を対象とした簡易アンケートを実施して, その結果を踏まえて「人間社会学域でのハラスメント防止」について, 総合相談室室長補佐の吉川一義教授による研修を対面・オンライン併用で実施した(出席者数: 教員24名, 事務職員8名)。</p>
理工学域 自然科学研究科	<p>理工学域・自然科学研究科では, 3月25日(月)13時からオンラインにて第15回理工FDシンポジウムを開催した。新型コロナにより各教員は様々な授業形態のスキルを身に付けてきたため, 能登半島地震や大雪警報のときは急遽全学オンデマンド授業に変更して教育を続けることが可能となり, オンデマンド・オンライン・ハイブリッド・ハイフレックスを以前と比べて容易に対応できるようになってきた。しかし, それらの授業形態の学修効果(学生の理解度)に関しては, よく分かっていないところが多い。</p> <p>今後, 様々な授業形態の中でどの方法を活用するかを判断するには, 各授業形態の学修効果(学生の理解度)を把握することが重要だと考え, 昨年度に引き続き「皆さんのアンケート」と「特別講演」を組み合わせ「授業形態と学習効果2」について考えるシンポジウムとした。参加人数は79名であつ</p>

部局名	FD 活動
	<p>た。</p> <p>まず事前に教員から自身の授業形態に関するアンケートを実施し、昨年度と同じ質問に対する回答の変化を示し、遠隔授業を経験した上で現在の対面授業で取り組んだことなどを教員間で共有した。その後、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部 村上 正行教授に、「DX時代における授業デザインと学習成果を考える」という題目で特別講演をいただき、様々な授業形態の特性を活かした授業設計の例やオンデマンド授業に対する学生の評価などを紹介いただき、どのような授業形態を選択したとしても学生に疑問を抱かせ、興味を高めさせることの重要性をご教授いただいた。また、生成AIの利用に対する近年の他大学の方針やメリットやデメリットを紹介いただいた。講演後は活発な質疑応答が行われ、授業改善に向けて様々な知見を得ることができた。</p>
<p>医薬保健学域 医薬保健学総合 研究科</p>	<p>2023年度には学内外の講師を招き、計10回の医学系FD研修会を実施した。新型コロナウイルス感染症の5類への移行に伴い、FD研修会を久しぶりに対面で開催することができた。今年度より医学類FD委員会は医療人材教育研究センターと連携することで、医学系だけでなく、薬学系や保健学系の教員も参加可能なFD研修会の実現を目指した。研修会の内容として多職種連携教育やテクニカルスタンダードなどを扱い、多くの教員が参加した。医学系および附属病院所属の教員がFD研修会の内容をいつでも確認できるように、FD研修会の資料や録画した動画をLMS「医学FD」上で共有してきた。また、FD研修会に年2回未満の参加であった医学系および附属病院所属の教員に対しては、オンデマンド教材の視聴とレポート作成を例年通り課して、FD研修会への参加を促す取り組みを継続した。</p>
<p>人間社会環境研 究科</p>	<p>本研究科では、FD 活動を通じて大学院担当教員に新たに求められる運営知識、問題や課題の意識向上を目指している。</p> <p>近年はアンケートを活用した FD 研修会を企画してきた。令和 2 年度は大学院における遠隔授業と研究指導について、令和 3 年度はコロナ禍における留学生の経験と困難について、令和 4 年度は大学院進学に関する意識についてアンケートを実施したが、令和 5 年度は企業・各種団体が大学院修了者に期待することなどについてアンケートを実施し、FD 研修会ではその結果と分析をめぐって討論を行った。これら調査により、従来は理系大学院修了者への期待と需要が高いと目されてきた分野でも人文社会系院生への潜在的需要が高いことが示され、それを現実化させるための方途について意見交換されたことは有意義であった。</p> <p>また、大学院改革に関しては、人文・社会科学系大学院に求められている変革について、文部科学省職員を講師に招いて講演会を開催し、我が国の大</p>

部局名	FD 活動
	<p>学院政策の方向性について理解を深め問題意識を共有するとともに意見交換を行った。さらに、本年度は人間社会学域と共同で学士課程学生の大学院進学意識に関する調査を学内ならびに全国において1000人規模で行い、その調査結果を元に文系大学院進学者を増やすための方策について議論した。</p>
国際基幹教育院	<p>国際基幹教育院は、GS教育系と外国語教育系から成り立っており、共通教育という枠組みを共有しながら一般教養科目と言語科目という個別の枠組みを有している。国際基幹教育院FD委員会では、両系が共催する形でFDを実施しており、令和5年度は9回の研修会を実施した。国際基幹教育院は、一括入試で入学した学生が1年間所属する総合教育部を運営している。第1回の研修会では、総合教育部担任経験者が作成した総合教育部担任マニュアルの利用法について紹介がなされた。また、アクティブ・ラーニング手法、新外国語カリキュラム、性的マイノリティと教育、受講生によるレポートの相互評価法、生成AIを利用した革新的教育支援、フューチャー・デザインの教育導入といった広範なテーマについても取り上げた。学外や学内他部局から積極的に講師を招聘し、教育研究活動の改善に取り組んだ。研修会の動画をLMS上で公開することにより、当日不参加だった教員にも活動情報を提供している。</p>

## 【学類単位】

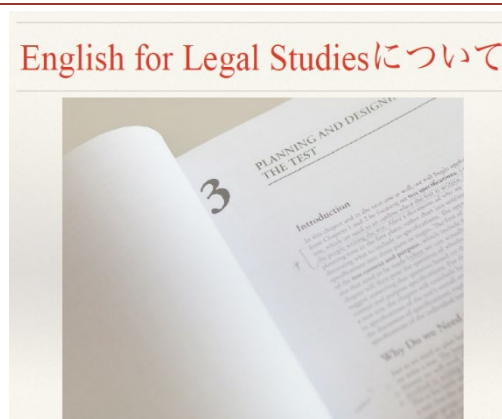
今回は、法学類、機械工学類、生命理工学類及び医薬科学類で実施している特色あるFD活動を紹介します。

### ○法学類

取組名称	法学類におけるEnglish for Legal Studies (EFLS) の現状と改善について
開催日	令和6年3月12日（火）
参加人数 (概数)	20名

法学類では、学生に法学や政治学に関連する英語のテキスト読解や聴き取り・会話能力を身に付けることを支援するため、異なった分野の教員がそれぞれの分野における英語表現を紹介する、English for Legal Studies（必修科目）という授業を行っている。

同授業を中心的に担当している東川教員から、例えば下記の国会を紹介する動画の視聴後に英語の小テストに解答させる等、いくつかの具体的な教材活用例や、英語授業ならではのさまざまな工夫について紹介があり、それに基づき今後、英語を中心とした外国語の授業をどのように進めるべきか教員間で意見交換を行った。



衆議院事務局チャンネル「Special English Diet Tour」より

## ○機械工学類

取組名称	理工3学類合同FD研修会
開催日	令和6年3月21日（木）
参加人数 （概数）	48名

機械工学類は、フロンティア工学類及び電子情報通信学類と合同で、毎年度、FD研修会を実施している。令和5年度は、教育活動のためのソフトウェアについて、2件の講演がオンラインで行われた。

講演1：大規模授業から最先端の研究まで広く深く活用できる、DX化が進むMATLABの最新技術紹介（Mathworks Japan）

包括ライセンスとして導入しているMATLABは、数値計算、Live Scriptや、可視化ツール、オンラインでの利用環境等が充実しており教育・研究を加速するプラットフォームとして利用できる。

**概要**

- MATLABご紹介
- Campus-Wide Licenseご紹介
- 学習コンテンツご紹介
- 教育DX活用事例
- Q & A

**教育環境のデジタル化への対応**

MATLAB Campus-Wide License

講演2：教育活動のためのソフトウェアツールの紹介（辻徳生准教授）

プログラミングと論文執筆に関係するクラウドを介したサービスを、実演を交えながら紹介。さらに、ChatGPTなどの機械学習を導入したサービスを使用する利点と注意点についても紹介。

**理工3学類FD研修会**

**教育活動のための  
ソフトウェアツールの紹介**

フロンティア工学系 辻 徳生

**replit**

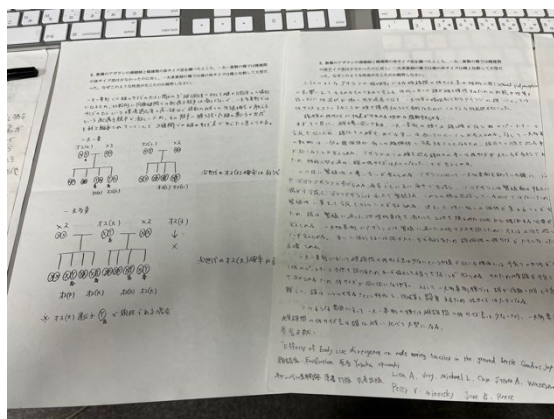
- 50以上の言語  
C言語, C++, python  
Fortran
- 無料のFreeプラン
  - プロジェクトがpublic状態
  - メモリとCPU使用上限に達すると速度制限
- ファイルのダウンロードアップロード可能



## ○生命理工学類

取組名称	学生のレポート作成の改善と実習実施方法の取り組み
開催日	Q3からQ4
参加人数 (概数)	10名

本学類では学生のレポートの作成法について検討と試験的運用を行った。近年、ITやネット情報の発達により安易な情報ソースやそのコピーで学生がレポートを作成してしまうケースが多い。校閲ソフトもあるがAIによる文章作成も横行しているためチェックが難しいのが現状である。それらへの対策として直筆によるレポート作成の対策を試験的にいくつかの講義で行った。A4用紙2枚程度にレポート課題を載せ、学生に直筆でレポートを作成、図表等も全て直筆して、提出する試みを行った。ソースや文書の作成方法に関係なく、学生はレポート課題に関する知識を身に付けることができる。また一部で問題となっていたレポート同士のコピーの対策にもなる。学生はレポートを熱心に作成してきたので教育効果は高かったと考えられる。今後はこうしたレポート作成方法を学類内に普及していく予定である。また本学類の特色の1つである能登の臨海実験所、水産センターを利用した学生実習の実施方法、宿泊を伴うため学生のメンタル面についても配慮すべく、検討を行った。しかし能登の震災によって2つの施設の実習での利用が難しいため再度検討する予定である。



## ○医薬科学類

取組名称	医薬科学類学生の現状について
開催日	令和5年10月26日（木）
参加人数 （概数）	13名
<p>令和5年度、医薬保健学域医薬科学類では、10月26日にオンラインでのFD研修会を実施した。医薬科学類は、次世代の医療分野の研究開発を担う医学と薬学にまたがる幅広い知識を習得した人材を養成するため、令和3年度から新たに設置された学類である。そのため、昨年度、一期生はまだ3年次であり、FD研修会では、医薬科学類学生の修学における状況を客観的に把握する目的で、「医薬科学類学生の現状について」と題してフリーディスカッションを行った。医学類との共同開講科目、もしくは薬学類との共同開講科目について、医薬科学類と対応する学類との成績状況の差や、GPAの分布状況の統計結果を評価しつつ、成績基準のありかたや学生間のコミュニケーションについて幅広く議論した。さらに、医薬科学類独自科目の充実や医薬科学類学生としての独自のアイデンティティを構築するための意見交換が行われた。</p>	

## 1-5 教学マネジメントセンターの活動

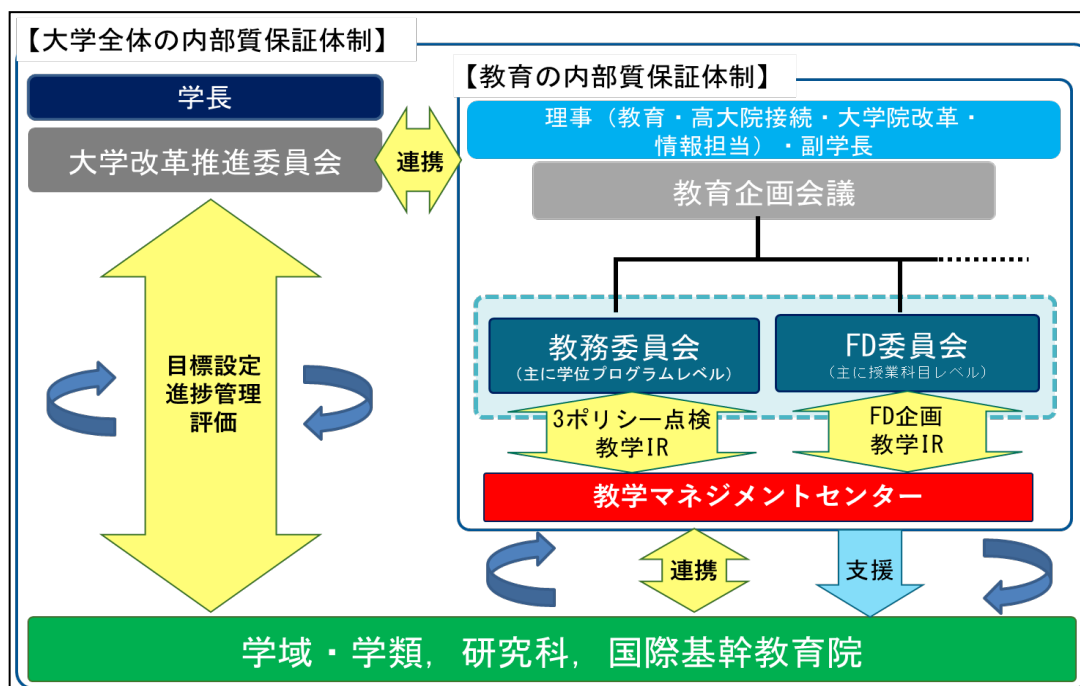
### 1-5-1 教学マネジメントセンターの業務概要

学長のリーダーシップの下、本学のFD支援、教学マネジメントを担ってきた国際基幹教育院高等教育開発・支援系及びICT教育支援を担ってきた総合メディア基盤センターを発展的に解消し、新たに令和3年4月に教学マネジメントセンター及び学術メディア創成センターを設置し、両センター連携によりFD、教学IR、教育DXを一体として推進する体制を構築した。

学内のマネジメント体制強化のため、教育担当理事・副学長の下に置く組織として位置付け、学内の連絡・調整を円滑にするため、全学の教務委員長・FD委員長を務める学長補佐をセンター長に据え、センターの業務を掌理する体制とした。教学マネジメントセンター設置以降、教育の内部質保証体制の明確化の観点から、各種検討や学内調整を重ねつつ、現在は、図表1に示す組織体制において、日々の活動を行っている。

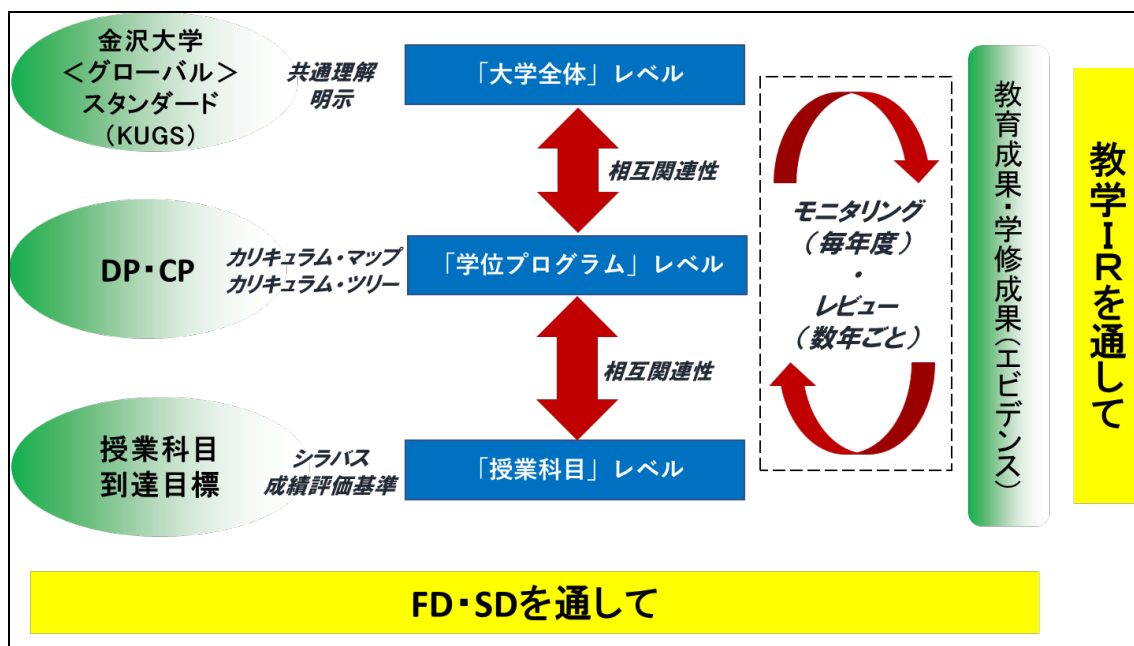
教学マネジメントセンターの具体的な所掌業務は、以下のとおりである。

- ① 全学の教学マネジメントの確立、学位プログラム等における教育の質保証及び質向上に関すること。
- ② 教育方法、教育システム及び教育支援等に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発に関すること。
- ③ 全学的に取り組む教育事業及び分野横断的学位プログラムの企画立案、運営及び評価に関すること。
- ④ 教育スキルの向上に資する支援に関すること。
- ⑤ 全学のFD・SDの企画・実施及び学域・研究科等のFD・SD活動の支援に関すること。



図表1 教学マネジメントセンターの設置及び関係組織との連携体制

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表2、図表3のとおり体系づけながら、各レベルに応じたFD・SD、教学IRの環境整備と具体的取組を進めている。



図表2 教学マネジメントセンターが支援する教学マネジメントの枠組の概要図

項目 レベル	教育・学修目標	改善充実のための機会 (FD・SD)	アセスメントツール (教学IR)
大学全体レベル (マクロ)	金沢大学 <グローバル>スタンダード (KUGS)	全学FD 新任教員説明会	学生生活実態調査 卒業・修了後アンケート
学位プログラムレベル (ミドル)	(各学類、専攻で定めた) ディプロマ・ポリシー (DP)	全学FD 学域・学類、研究科FD	卒業・修了者アンケート DP達成度自己評価
授業科目レベル (ミクロ)	(シラバスに明記された) 学修目標	全学FD 学域・学類、研究科FD 新任教員説明会 CLA研修	授業評価アンケート 成績評価分布

図表3 アセスメントプランの枠組の概要図

## 1-5-2 FD・SD 活動の枠組と実績

令和 3 年度の教学マネジメントセンター設置以降、教育担当理事・副学長及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立った FD・SD 活動を行いながら、部局 FD との協働・連携・支援を行っていく必要があるため、「全学 FD・SD」と「部局 FD」の関係性について事項整理しながら、「全学 FD・SD」で担うべきこと、「部局 FD」で担うべきことを明確化した。

### 【「全学 FD・SD」の役割と基本メニュー】

#### ①「全学 FD・SD」の役割

- ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
- ◆教職員として知っておくべき事項，遵守すべき事項の理解と共有
- ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
- ◆教職協働，教職学協働のための場づくり

#### ②「全学 FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表 4 全学 FD・SD の年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会，高度TA研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

### 【「部局 FD」の役割と基本メニュー】

#### ①「部局 FD」の役割

- ◆各部局における主要事項の理解と共有
- ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
- ◆各部局における授業・カリキュラム，学修状況・成果の把握・検証
- ◆各部局における全学的課題の理解と共有

## ②「部局 FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催での FD 活動について、以下の二つの区分に整理した。

- ア) 個別テーマ型 FD・・・部局における主要事項の理解と共有、部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として、当該部局が独自のテーマ設定により実施する FD
- イ) 統一テーマ型 FD・・・全学的課題の理解と共有などを目的とし、教学マネジメントセンター等が連携・支援しながら実施する FD  
(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、機関別認証評価で求められる学位プログラム単位の DP・CP、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・見直しなど)

令和 5 年度においては、FD 委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学 FD 研修会に加え、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の周知を主な目的とした、教職学協働型の KU-STEAM ランチョンセミナーを昨年度に続き企画実施した。また、高大接続コア・センターと共同主催した「探究・STEAM フェスタ」についても昨年度に続き企画実施し、高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画として学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトに公開・配信している。なお、令和 5 年度に入り対面での実施が主となっているが、対面とオンラインそれぞれのメリットを活かした効果的な FD 機会を提供していきたい。令和 5 年度全体の FD・SD 実績は以下のとおりである。

図表 5 令和 5 年度 FD・SD 実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会	4月4日(火) 午前の部 4月4日(火) 午後の部	53名 83名
KU-STEAMランチョンセミナー	4月下旬～11月上旬 計9回開催	323名
全学FD研修会 「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society5.0における人材育成の姿～」	8月8日(火)	118名 (学外公開)
全学FD研修会及びKU-DPアドバイザーボード 「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」	9月27日(水)	62名 (学外公開)
全学FD研修会 FD活動報告書成果発表会	10月27日(金)	51名
「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」共通テーマ4参加校合同主催 教学マネジメントセミナー2023 「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」	11月28日(火)	166名 (学外公開)
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月10日(日)	114名 (学外公開)
令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」 採択校合同シンポジウム	2月27日(火)	145名 (学外公開)

### 1-5-3 学位プログラムレベル・授業科目レベルを中心とした教学マネジメント環境整備

教学マネジメントセンターでは、昨年度に続き、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備を進めた。

具体的には、令和4年度再整備した3つのポリシーの一貫性のある見直しを受けて、教育の内部質保証に関する指針の策定、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備を行うとともに、学類長ヒアリングの実施、さらには、大学院学生版トランスファラブルスキルの策定に向けた検討を行った。

#### 1-5-3-1 「金沢大学における教育の内部質保証に関する指針」の策定

未来ビジョン『志』milestoneにおいて、下表のとおり目標設定した「学位プログラム評価の仕組みの構築」を目的に、教育の内部質保証の規定化に取り組んだ。この規定化の作業は、いわゆる「アセスメントプラン」の策定作業に該当するものであり、茨城大学『教育の内部質保証マニュアル』等の他大学の事例を参照しながら、取りまとめを行った。

図表6 金沢大学未来ビジョン『志』milestone 抜粋

教育-1-③-2	学位プログラムレベルの教学マネジメントの強化		担当理事等 (担当部局)	教育・高大院接続・大学院改革・ 情報担当理事(学務部)
行程(時期及び具体的な事項を簡潔に記載すること)				
2022年度	2023年度	2024~2025年度	2026~2027年度	
<ul style="list-style-type: none"> <li>3つのポリシーの策定内容の把握・改善</li> <li>カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの改善充実</li> </ul>				
<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の仕組み化についての検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の仕組みの構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の実施</li> <li>大学全体レベル及び部局レベルの内部質保証体制の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の完了</li> <li>大学全体レベル及び部局レベルの内部質保証体制の検証</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>機関別認証評価での是正勧告、改善課題等に係る課題解決の実施</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析の開始IR</li> <li>卒業者の追跡調査IR</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価を支えるFD・SD、教学IRの学内環境の整備</li> <li>機関別認証評価での是正勧告、改善課題等に係る課題解決の実施・大学基準協会への報告</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析の継続</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラムレベルの教育成果及び学修成果の情報公表</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析に基づくカリキュラム改革の検討</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラムレベルの教育成果及び学修成果を情報公表・検証</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析に基づくカリキュラム改革の実施</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	

教育の内部質保証については、「教学マネジメント指針」(中央教育審議会大学分科会(令和2年1月22日))に沿って、「大学全体レベル」「学位プログラムレベル」「授業科目レベル」の3つのレベルに分けて捉え、各レベルに応じた日常的な点検(モニタリング)及び総合的な点検・評価(レビュー)の方法を明記。

各学位プログラムの責任者は、毎年度1回の日常的な点検(モニタリング)及び7年に1回の総合的な点検・評価(レビュー)の結果について、教育担当理事・副学長に報告。教育の内部質保証の推進責任者である教育担当理事・副学長は、教育企画会議の議を経て、内部質保証の統括責任者(学長)に報告。

日常的な点検（モニタリング）及び総合的な点検・評価（レビュー）において参照すべき各種調査データ提供及び分析等について、各学位プログラムの責任者からの依頼の下、教学マネジメントセンターが支援。

### 1-5-3-2 カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備

令和3年度機関別認証評価における指摘事項を踏まえ、令和4年度には学士課程・大学院課程全般にわたり、ディプロマ・ポリシー（DP）及びカリキュラム・ポリシー（CP）を中心とした3つのポリシーの体系的整理を行い、大学Webサイトで公開した。これを受けて、令和5年度には、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的整理を行うとともに、学修成果可視化システム（仮称）運用のための環境を整えた。

なお、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーについては、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会2020）において言及があるとおり、学位プログラムレベルの教学マネジメントにおいて、カリキュラム上の各授業科目の位置付けの明確化や授業科目間の相互関連性や順序性を明確化するツールとして重要不可欠なものであり、教育の内部質保証に関する点検項目として認証評価でも重視されている。

#### （1）カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの再整備

カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーについて、従来、学士課程のみ対象として、作成依頼を行ってきたが、新たに、大学院修士課程・博士前期課程も作成対象に追加し、再整備を行った。なお、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの作成依頼にあたり、教学マネジメントセンターにおいて、作成マニュアル及びテンプレートを提示するなどの支援を行った。

#### （2）学修成果可視化システム（仮称）運用のための環境整備

カリキュラム・マップを活用し、学生個人個人の学修度を可視化する仕組みを新たに導入することとしている。融合学域では、同学域が開発した「学びの計画書」を通して先行実施しているが、各学位プログラムのDPに関係する授業科目の単位修得に応じて、学修度をカウントする学修成果可視化システム（仮称）を全学的に運用予定である。このシステムにより、学生自身の学修目標設定と振り返りを通じた主体的な学びの実現が期待される。

このため、（1）で作成依頼するカリキュラム・マップにおける授業科目ごとの関係するDPへのマーク付けを従来のような「◎」「○」「△」といった重み付けをなくし、「○」のみのマーク付けに簡素化を図った。

### 1-5-3-3 学類長ヒアリングの実施

近年、ディプロマ・ポリシー（DP）やカリキュラム・ポリシー（CP）を軸とした3つのポリシーに基づく学位プログラムレベル及び全学レベルの教学マネジメントが重視されている。教学マネジメントセンターでは、各学類における教育・学修の実態について把握し、教学マネジメントの更なる充実に資することを目的に、学類長及び教務担当教員を対象としたヒアリング調査を実施することとした。



併せて、令和4年度の「知識集約型社会を支える人材育成事業」中間評価結果を踏まえ、全学で進める文理融合教育について専門教育の観点から更なる充実を図る必要性があることから、各学類における文理融合・分野横断教育の実態を把握することも目的とした。

#### 【調査対象・実施時期】

調査対象：人間社会学域・理工学域・医薬保健学域の全17学類

(※融合学域は、別途、「知識集約型社会を支える人材育成事業」中間評価対応で個別調査)

対応者：学類長及び教務担当教員

実施時期：令和5年4月28日(金)～6月15日(木)1時間～1時間半程度

#### 【調査項目】

以下の項目を事前に送付し、半構造化インタビュー形式で行った。なお、以下の項目以外に、「学類における教学関係会議」「全学委員会から依頼事項に対する学類内での作業系統」「各年次における学生支援(アドバイザー教員、指導教員等)」のほか、「カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの活用度合」「卒業・修了者アンケート結果の活用度合」を聴取した。

- ①学類におけるDP・CPの認知度及び学生への説明機会について
- ②学類におけるカリキュラム・シラバス・成績評価分布・授業評価アンケートの定期的点検について
- ③専門教育の特徴・強み及び現在、学類が抱える教育上の課題について
- ④学類における学生の学修行動・学修成果の把握について
- ⑤学類における文理融合・分野横断教育について
- ⑥卒業論文・卒業研究の評価方法や評価基準について
- ⑦学類学生に対する研究指導体制について
- ⑧学類におけるFD活動について
- ⑨学類におけるキャリア支援や留学支援について
- ⑩その他

#### 【ヒアリング調査結果概要】

##### <教学マネジメント関係>

- (1) 3つのポリシーの認知度、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの活用度合について、一層の改善充実が必要である。履修案内(学生の手引き)において、3つのポリシー、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーを掲載している部局が少なく、今後、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを掲載することが推奨される。
- (2) 卒業・修了者アンケート結果の部局内共有が不十分な部局が見られた。今後、卒業・修了者アンケート結果の有効活用について、全学FD委員会等を通して周知徹底していく必要がある。
- (3) 授業科目レベルにおけるシラバス作成の徹底や授業評価アンケート結果の確認は、どの部局においても行われている。なお、学校教育学類において、人間社会学域での授業評価アンケート実施クラス要件が「受講者数20名以上」となっていることについて

て改善の必要性が指摘された。

#### <専門教育カリキュラムの工夫>

(4) 今回の学類長ヒアリング調査を通して、コースやプログラム単位で閉じることがないように、カリキュラム上の工夫を施している学類が相当数見られた。この傾向は、学域・学類制の本来の趣旨を押さえながら、分野横断型の教育を提供しようとする意図が感じられる。具体的には、学校教育学類共同教員養成課程、地域創造学類（プログラム移行後）、薬学類、医薬科学類では、年次を超えた学生交流機会（先輩の発表を後輩が聴講するなど）や複数の研究室体験・取材を授業科目化しているケースが見られる。

#### <専門教育における学修成果の把握>

(5) 学位プログラムとしての学修成果の把握の好事例として、薬学類「薬学研究」「実務実習」におけるルーブリック活用や保健学類看護学専攻における卒業時の看護分野知識・技能に関するチェックリスト活用が挙げられる。また、法学類では、専門教育科目における筆記試験の模範解答を学内限定で学生に開示しており、専門教育科目の質保証を図っている好事例として挙げられる。このほか、国際学類では、卒業論文に求められる観点を履修案内において明示している。

#### <TA等の研修の再整理の必要性>

(6) 授業補助、実験補助を行うTAを対象とした研修やマニュアルが不十分な印象を受けた。今後、設置基準改正に伴う「指導補助者」の扱いが重要視される中で、CLA研修、高度TA研修を含めた体系的再整備が必要と思われる。

#### <教学IRに関する案件>

(7) 入学区分の違いによる入学後の学業状況、卒業研究着手要件及び進路に関連した学生の履修状況について確認を行った。

### 1-5-3-4 授業評価アンケート結果のレーダーチャート表示の充実

教学マネジメントセンターでは、FD委員会を通して、令和3年度までに授業評価アンケートの共通設問項目を整理したことを踏まえ、令和4年度より新しい授業評価アンケートシステムを運用し、共通設問項目の回答結果を各部局にフィードバックしている。令和5年度において、図表7、図表8のとおり、各授業科目担当教員が授業改善を検討する際の参考となるよう、授業評価アンケート結果における共通設問項目の平均値と各授業科目の値をレーダーチャートで比較できる機能を追加した。比較対象は次のとおりである。

- 共通教育科目の授業評価アンケートの場合：当該アンケート実施期間における共通教育全科目の平均値
- 学域・研究科開講科目の授業評価アンケートの場合：当該アンケート実施期間における授業開講学域・研究科及び学類・専攻の平均値（ただし、医薬保健学域・医薬保健学総合研究科の授業開講学域・研究科及び学類・専攻の平均値は同一）

一般アンケート

公開期間中の一般アンケートはありません。

2022年度 対象学期: ---

授業アンケート

年度	授業年度	研究科	時間割コード	科目名	担当教員	開講期	曜日・時間	アンケート名	集計結果
1	2022	共通教育	71A10a.214	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	月4	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
2	2022	共通教育	71A10a.215	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	月5	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
3	2022	共通教育	71A10a.222	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火2	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
4	2022	共通教育	71A10a.223	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火3	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
5	2022	共通教育	71A10a.224	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火4	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果

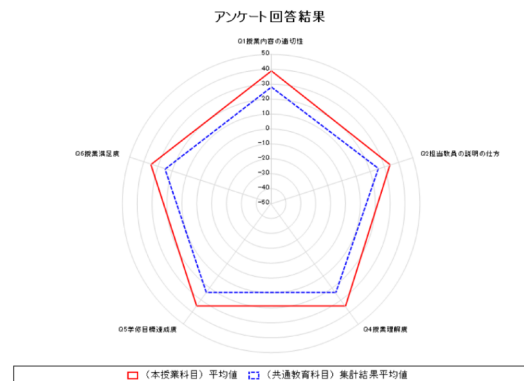
PDF出力

アンケート名	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート
実施期間	2022/07/25~2022/09/25
時間割番号	71A10a.222
科目名	現代世界への歴史学的アプローチ
担当教員	教員 太郎
受講者数	10

授業内容の適切性

Q1 この授業は、あらかじめシラバスに示された学習目標や授業計画に沿って行われましたか？【必須入力】

共通教育科目の授業評価アンケートの場合は、アンケート結果表示画面の末尾に本授業アンケートの平均値に加えて、同一アンケート内の共通教育科目の平均値が表示されます。



図表7 共通教育科目における授業評価アンケート結果閲覧画面（担当教員用）

一般アンケート

公開期間中の一般アンケートはありません。

2023年度 対象学期: ---

授業アンケート

年度	授業年度	研究科	時間割コード	科目名	担当教員	開講期	曜日・時間	アンケート名	集計結果
1	2023	理工学域	52-20042.301	プレゼン・ディベート論	教員 太郎	Q2	火5	【理工学域】2023年度 第2Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果
2	2023	理工学域	52-41105	動画デザイン実習	教員 太郎	Q1,Q2	水3~5	【理工学域】2023年度 第2Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果
3	2023	理工学域	52-42125	動画デザイン実習	教員 太郎	Q1,Q2	木3~5	【理工学域】2023年度 第2Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果

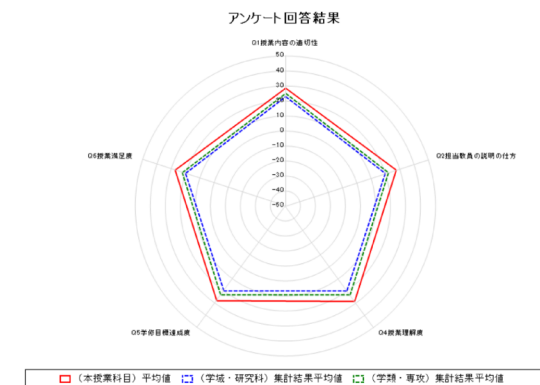
PDF出力

アンケート名	【理工学域】2023年度 第2Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～
実施期間	2023/07/24~2023/09/25
時間割番号	52-20042.301
科目名	プレゼン・ディベート論
担当教員	教員 太郎
受講者数	

授業内容の適切性

Q1 この授業は、あらかじめシラバスに示された学習目標や授業計画に沿って行われましたか？【必須入力】

専門科目の授業評価アンケートの場合は、アンケート結果表示画面の末尾に本授業アンケートの平均値に加えて、同一アンケート内の同一学域・研究科の平均値、同一学類・専攻の平均値が表示されます。



図表8 専門教育科目における授業評価アンケート結果閲覧画面（担当教員用）

### 1-5-3-5 大学院課程<グローバル>スタンダードの見直し検討

本学では、令和4年度から、博士前期・後期課程における大学院GS科目も強化し、大学院学生が将来のキャリアに備え、幅広い識見や異分野の知識・スキルを修得することで、主たる専攻分野での深い探究に役立つことを目指している。大学院教育の高度化と平行し、国による博士学生支援事業「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」及び「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の支援を受けて、令和3年度から、博士後期・博士課程学生への経済的支援をはじめ、学際性や国際性の涵養、トランスファラブルスキルの向上、キャリア形成等に資する各種プログラムの提供を充実させている。また、令和5年度には、令和6年度から事業開始の上記2事業の後継事業「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の採択を受け、これらの取組みの加速に向けて準備を進めている。

令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「大学教育改革に向けた取組の実施状況」として、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程、専門職学位課程におけるトランスファラブルスキル（社会で広く活用できる汎用的なスキル）のカリキュラム上の明確化、さらには、トランスファラブルスキルを含めた学修成果の可視化や就職活動等での活用が求められている。

上記のような状況を踏まえながら、金沢大学未来ビジョン『志』milestoneにおいて、大学院教育における大学院学生版トランスファラブルスキルを策定することを行動計画として掲げている。

《令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「大学教育改革に向けた取組の実施状況」に関する指標》

【博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程、専門職学位課程】

- ① 学生が、社会で広く活用できる汎用的なスキル（トランスファラブルスキル）等を身に付けた上で修了できるよう、組織的かつ体系的な教育・研究指導を通じて修得すべきスキル・資質・能力と、それに対応するプログラムが整理された上で可視化・実施されている。
  - a) 実施している
  - b) 実施していない
- ② ①が満たされた上で、成績表以外で、在学中から卒業・修了に至るまでその修得状況が学生ごとに客観的・多角的に可視化し、当該学生が確認するとともに、就職活動等において活用できる状態となっている。
  - a) 実施している
  - b) 実施していない

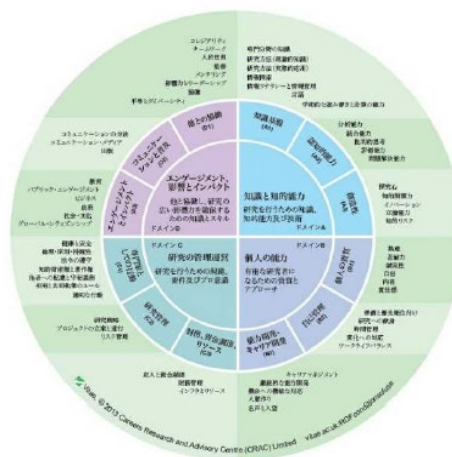
文科省の上記の指標に関する補足説明では、「社会で広く活用できる汎用的なスキル（トランスファラブルスキル）」とは、例えば、欧州科学財団（European Science Foundation）の報告書“Research Careers in Europe Landscape and Horizons”（2009）では、「一つの文脈で学んだスキル、例えば、研究を行う上で学んだスキルの中で、他の状況、例えば、研究であれば、ビジネスであれば、今後の就職先において有効に活用できるようなスキルのことである。そしてまた、トランスファラブルスキルがあれば、学問領域及び研究関連のスキルを効果的に応用したり、開発したりすることができるようになる」と定義されており、

「そうした取組を想定しています。」と記載があり、具体的な事例として、英国の非営利組織 Vitae が 2010 年に開発した研究者人材に必要なトランスファラブルスキルのフレームワーク (RDF) を提示している。

なお、大学院教育におけるトランスファラブルスキル・トレーニングについては、2010 年代に注目され、大阪大学などにおいて当該トレーニングを行っている実績がある。

### Researcher Development Framework;

英国においてプロフェッショナル・ディベロップメントの分野で中心的な役割を担っている非営利組織 Vitae により開発された、研究者にとって必要な能力やスキル等を体系化したフレームワーク。4 つのドメイン、12 のサブドメイン、63 のディスクリプタで構成されている。ディスクリプタごとに必要スキルの詳細が定義されており、それぞれ研究者の段階 (博士課程在籍者、ポスドク、卓越した研究者、シニア研究者/著名な研究者) に分けて細かく設定されている。



図表 9 Researcher Development Framework (Vitae)

### 【これまで検討してきた方向性】

#### (1) 大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂と学生・教職員への明示

本学では、大学院課程<グローバル>スタンダードが策定・公表され、「1. 強固なグローバルマインドと明確な倫理的思考：今後、人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力」「2. 創造性・交渉力・統率力・実践力：解決困難な課題にも、革新的なアイデアと粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を打開する能力」が掲げられているが、内容面において、上記の趣旨を踏まえつつ、改訂を行うことが必要である。具体的には、大学院 GS 科目の学修目標と関連付けつつ、大学院学生版トランスファラブルスキルとして再定義し、学士・大学院一貫教養教育 WG で学生・教職員に明示することを検討している。

#### (2) 大学院学生版トランスファラブルスキルの学修成果可視化と学生への明示

大学院<グローバル>スタンダードの改訂を踏まえながら、当該スタンダードで定めたトランスファラブルスキルの修得度合について、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程及び専門職学位課程の学生を対象に、学務情報システム等を通して自己評価アンケートを定期的実施することが考えられる。そして、当該自己評価結果を学生個々人が同システム上において確認できるようにすることが考えられる。

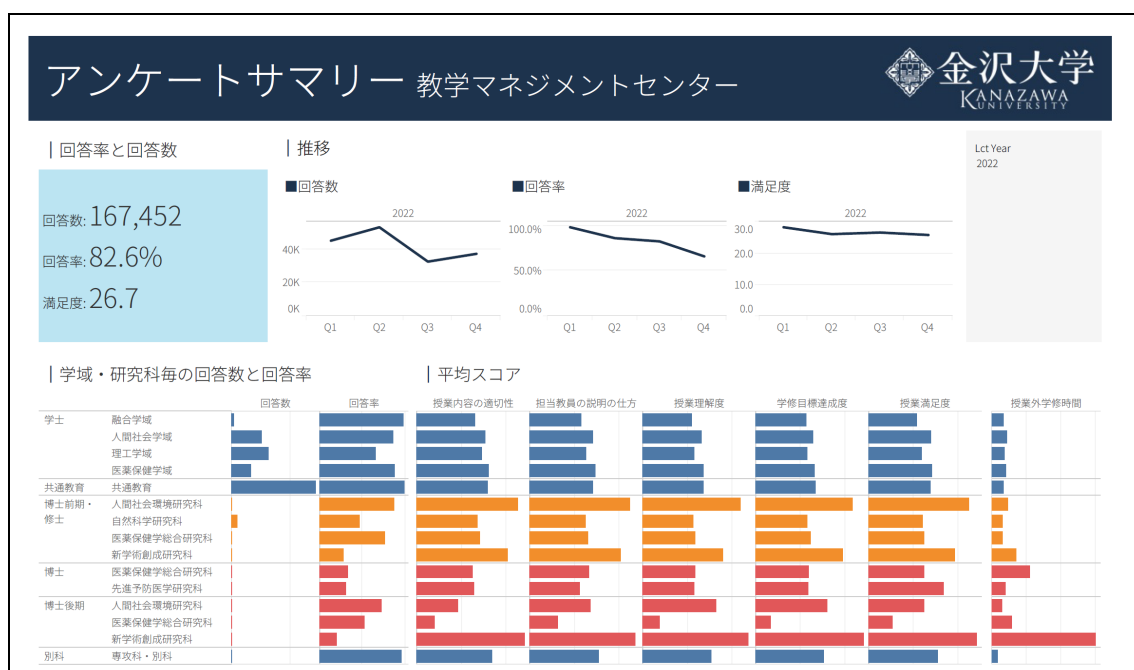
併せて、大学院 GS 科目における授業評価アンケート等を集計・分析しながら、大学院学生版トランスファラブルスキルの修得度合を把握することを検討している。

#### 1-5-4 教学 IR 環境整備

令和 3 年度に、教学マネジメントセンターが中心となり、授業評価アンケートにおける共通設問化、卒業・修了者アンケートにおける学生生活満足度の設問の統一化を行うとともに、当該結果の集計を教学マネジメントセンターで行う環境を整備した。

令和 4 年度から令和 5 年度にかけて、FD 委員会を通して、当該集計結果を各部局にフィードバックする環境を整えるとともに、FD 活動報告書における当該集計結果概要を掲載、さらには、教学マネジメント FACTBOOK の刊行にまで漕ぎつけた。

授業評価アンケートについては、BI ツールである Tableau を活用した基礎集計のダッシュボード化（下図参照）を整備し、教学マネジメントセンター及び学務部学務課の関係者にて閲覧できる環境を整備している。令和 5 年度において、授業評価アンケートと同様の定例調査である卒業・修了者アンケートに関する Tableau を活用した基礎集計のダッシュボード化の整備を進めている。



図表 10 授業評価アンケート結果ダッシュボード（一部）

#### 【授業評価アンケート，卒業・修了者アンケート結果の閲覧環境整備】

令和 3 年度以前には、各部局において授業評価アンケート結果を集計し、下記サイトに掲載していたが、部局による作業負担軽減の観点から、教学マネジメントセンターにおいて、授業評価アンケートとともに、卒業・修了者アンケート結果の掲載・更新作業を行う。

なお、専門職大学院等において、独自のアンケート実施を行っている部局については、従前のおり、当該部局において当該アンケート結果の掲載・更新作業を行う。



図表 11 授業評価アンケート結果に関する従前の掲載画面